

第16回わくわくコンサート

— みんなで楽しむ音楽鑑賞会 —

代表者 玉井亮輔（教育学部 学校教育教員養成課程
小学校教育コース 社会領域 4年）

1. 目的と概要

【目的】

本事業は、小さなお子様や特別な支援を必要とする方など、日ごろコンサートに参加することが難しい方をはじめ、誰もが気軽にホールで音楽を楽しんでいただける機会を創出することを目的とした活動で今回、16回目を迎えました。香川大学生を中心に活動し、先生方や大学職員の方々、卒業生、演奏者、企業、団体等のご協力を得て、毎回無料でコンサートを実現しています。演奏を楽しんでいただくことをはじめ、その年のテーマに沿ったイベントを行い、テーマ国の文化や芸術にふれていただく機会となること、またそれを通して市民の方々の交流・共生の場とする事も目指しています。

【概要】

◆プログラム（指揮：小森康弘 オーケストラ：Wakuwaku 室内管弦楽団）

テーマ：——Recovery 復活・回復——

1. J. S. バッハ：管弦楽組曲 第3番 BWV1068 より「G線上のアリア」
2. W. A. モーツァルト：セレナード 第13番ト長調 K.525
「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」
- ★ L. v. ベートーヴェン：交響曲 第9番 Op.125 より「歓喜の歌」（ラップ）
3. S. ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番 Op.18 第1楽章 モデラート
4. M. ムソルグスキー/M. ラヴェル：展覧会の絵

◆イベント

開演前：EU 紹介ビデオの上映

ロビー展示：《EU27か国絵画展》（高松市立山田中学校美術部）

終演後イベント（ステージ上）「大ホールでピアノを弾こう！」（先着10名様）

「指揮者なりきり撮影会」（先着50名様）

◆主催等

主催:第16回「わくわくコンサート」実行委員会

後援:駐日欧州連合代表部

香川県 香川県教育委員会 高松市 高松市教育委員会

助成:(公財)置県百年記念香川県文化芸術振興財団

協賛:(公財)南海育英会 松楠会(香川大学教育学部同窓会)

協力:香川大学 EU 情報センター(香川大学図書館) 幸楠会(香川大学教育学部後援会)
(株)レアスウィート 美巧社

◆日程等

- 2月 新実行委員会本部立ち上げ プログラム・イベント等検討・助成金申請
- 7月 実行委員決定
各種配布物等準備・当日ボランティア募集
- 10月 後援・共催等確定 曲目・演奏者最終決定
第1回実行委員会
- 11月 チラシ入稿 入場者数決定
チラシ配布先決定
当日ボランティアの募集締め切り
プログラム入稿
配布物(曲目解説・クイズ・歴史案内・アンケート)の作成
- 12月 ホール打ち合わせ
チラシ・ポスター完成
- 1月 本部会議
第2回全体実行委員会
わくわくコンサート本番
- 2月 反省会
報告書等作成
- 3月 報告会参加

2. 実施期間(実施日)

令和5年1月29日(日) 13:00~16:00 (開場12:20)

3. 成果の内容及びその分析・評価等

◆運営体制、集客方法と広報および評価

昨年に引き続きコロナ禍での開催となりましたが、昨年、一昨年の状況と比べるとイベント時の規制緩和が進み、少しずつ以前の状態に戻ってきつつあることが感じられました。しかし、まだまだ油断のできない中での開催であり、実行委員一同気を引き締め、できる限りの準備と工夫に

力を入れました。

実行委員会は、昨年度末に前回の実行委員会からリーダーを受け継いだ4名に新メンバー2名を加えた6名が本部を構成し、そこにそれぞれの役割の責任者30名を加えました。また責任者のもとで活動するボランティアを秋頃に募集し、ボランティアは開催当日にホールでの活動に参加しました。集客方法や入場者数は、チラシ入稿限度ぎりぎりの10月まで見極めました。イベントの規制緩和があったため前年度のような事前予約制を取らず、十分なソーシャルディスタンスが確保できる800名を入場者数として設定しました。

広報は例年通りチラシの配布、レグザムホールや大学のHPへの掲載を行いました。フリーペーパー、タウン誌から掲載の申し込みがあり、開催日直前に多くの世帯へ配布されたことで、効果的な広報をすることができました。また当日までにはさらに感染症をめぐる状況が緩和の方向に向かったこと、今回の会場であるレグザムホールの収容人数が大きかったことなどもあり、実行委員会の想定を大きく超える1000名近いお客様にご来場いただき、入場いただくことができました。



アンケート結果では、小学生以下のお子様の88%、大人の98%が「楽しかった」と回答くださいました。また、実行委員とボランティアの100%が、「この活動に意義を感じた」と回答しています。今後改善すべき様々な課題もありますが、多くのお客様の笑顔あふれるコンサートとなり、本コンサートの本格的な実施が待たれていたことを実感しました。

アンケート結果では、小学生以下のお子様の88%、大人の98%が「楽しかった」と回答くださいました。また、実行委員とボランティアの100%が、「この活動に意義を感じた」と回答しています。今後改善すべき様々な課題もありますが、多くのお客様の笑顔あふれるコンサートとなり、本コンサートの本格的な実施が待たれていたことを実感しました。

◆コンサートの内容

今回は「Recovery 復活・回復」をテーマとし、テーマ地域をEU、テーマアルファベットを「R」に設定しました。挫折から復活してピアノ協奏曲第2番を作ったラフマニノフや、没後100年にして復活を果たしたJ.S.バッハの作品を取り上げたほか、《展覧会の絵》には、終曲の「キーウの大きな門」も含まれており、世界で起きているパンデミックから回復し、戦争や侵略を乗り越えて平和で明るい未来を祈るプログラムとなりました。また、演奏者には、KJO（香川ジュニアオーケストラ）の優秀な演奏者や、同団を卒業した奏者にも加わっていただきました。香川大学生と合同で事前練習を行うなど、より質の高い演奏会を目指して活動しました。



4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

今回のプログラムにはラフマニノフとムソルグスキーという二人のロシア生まれの作曲家も含まれています。ラフマニノフも政治的には大変苦勞し、最後はアメリカに亡命した作曲家ですが、ヨーロッパでも広く活躍しました。ムソルグスキーの《展覧会の絵》は一部に謎の残る作品ですが、タイトルには5種類の言語が使用され、ヨーロッパ各地の情景も作品に織り込まれています。また、民衆に深く入り込み、苦しむ民衆の心情に寄り添うような情景が描かれているほか、「キーウの大きな門」で終曲を迎えます。今回、駐日欧州連合から後援していただき、大使から「ウクライナのように、戦争や侵略により大きな被害をこうむり続けている地域の平和と復興(Recovery)を心より願うという意味においても主催者と思いを一つにしております」とのメッセージを頂戴しました。パンデミックを経て、平和への願いを学生とお聴きくださった皆様で共有できたのではないかと考えています。

今年度は、昨年とは異なりコンサート開催についての規制緩和があったとはいえ、感染症の危険が完全になくなったわけではありません。感染者数が減じきらない中でも当日は開場時間前から多くのお客様が足を運んでくださいました。音楽を楽しみたいと感じている地域の方々の気持ちが私たちにも伝わってきました。感染症対策には、可能な限りの配慮をしながら取り組みました。コンサート終演後には、「素敵なおコンサートを開いてくれてありがとう」、「本格的なオーケストラを聴けて良かった、ずっと続けてほしい」等のお声をたくさんいただきました。また、「子どもにとっても良い経験になった」という保護者の方からのお声もありました。教育学部から参加した学生にとってもだけでなく、他学部から参加した学生にとっても、地域の子どもたちに貢献する経験ができる取り組みになったのではないかと考えています。この事業を通してわくわくコンサートが地域の方々にとって、欠かせないものになりつつあるということを実感しました。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

本事業を通して、どんなことが工夫できるのかを可能な限り考え続けることの重要性と協力し合うことの大切さを学びました。新型コロナウイルス感染症の影響を受ける以前のわくわくコンサートは、ホール内の席は全て使用し、プログラムも2部構成、開演前後にはロビー、ステージなど様々な場所を利用してイベントを行っていました。しかし、第14回、第15回のコンサートでは新型コロナウイルスの影響を受け、楽器体験をはじめとする大人気のイベントは中止とせざるを得ませんでした。今年度は感染症対策を行った上で、一部でも子どもたちが楽しめるイベントが復活出来ないかと考え、ステージ上での「指揮者なりきり撮影会」と「大ホールでピアノを弾こう!」を実施することになりました。イベントでは子どもたちのたくさんの笑顔を見ることができ、喜びを感じるとともに、困難な状況においても可能な限り工夫することの大切さを実感しました。

コンサート当日の活動場所は、主に3か所あります。ロビー、ホール、舞台裏です。それぞれの場所で実行委員とボランティアの一人一人が活躍し、全員の力が合わさった結果、ご来場いただいたお客様を笑顔にすることができました。また、本事業は香川大学内だけで完結するものではありません。香川大学生が運営の中心で活動しているとはいえ、演奏者、企業や団体の皆様、卒業生、先生方や大学職員の方々、本当に多くの皆様のご協力を得て、成り立っています。学生だけでは本事業を行うことはできませんでした。平成19年度から続いているコンサートを今年

度も無事に開催できたことを心より嬉しく思います。



6. 反省点・今後の展望（計画）・感想等

今年度は、昨年度の感染症対策や反省点を踏まえた上での開催となりました。様々な我慢を強いられてきた中で、少しでも地域の方々の心の癒しになればと、コロナ禍の期間を通して何とか工夫を行って本事業を実施したことに意義を感じています。

運営に携わった学生からいくつか反省点が挙げられました。いちばんの反省点は、来場者への対応です。計画では制限を設けた 800 名の入場者を想定しましたが、当日は実行委員会の予想を大きく超える 1000 名近いお客様にご来場いただいたことで、お客様への対応が一部追いつかなくなってしまいました。会場の空席状況や親子室の空き状況をスタッフ同士で共有することができない時間帯が生じたことで、お客様を待たせてしまうこともありました。終了後の反省会では、「完全予約制にした方が良いのでは」との意見もあがりました。来年度の開催に向けての検討事項としたいと考えます。また、仕事の内容説明に不十分な点があったという点も挙げられました。対面での打ち合わせが難しい状況だったため、ボランティアの皆さんには、説明の文書を作成して仕事内容等について周知しましたが、いくつか問題点がありました。まず、説明の意図が十分に伝わらない文言があったこと、そして会場変更があったためにこれまでに受け継がれてきたノウハウを当日になって変更せざるを得ない点が生じた点です。本部ではホールの下見、事前に他のコンサートへ参加したことなどを通して、考えられる限りの様々な準備を行っては来たのですが、当日は想定外の部分が生じました。来年度は情報共有の方法も工夫しながら、経験者も少しずつ増やして、より良いコンサート運営が出来るようにしたいと思います。前回そして今回のコンサート運営に主体となって携わった 4 年生の学生はこの春で卒業となります。コロナ禍での経験を具体的な形で次の実行委員たちに確実に継承するには、仕事内容を記載した資料を再度見なおし、作り直して継承しておく必要があります。来年以降もわくわくコンサートが良い形で継続していけるように記録を残し、そしてその他にも気づいた反省点を検討し、次回のコンサートに活かしていきたいと思います。

次回、「第 17 回わくわくコンサート」は再び会場を移し、レグザムホール小ホールでの開催を予定しています。もう既にメンバーの募集や申請書の作成、プログラムの検討等も始めています。来年度も実行委員を中心に多くの学生や地域の方々に関わっていただきながら、誰もが楽しめるコンサートを作り上げていきたいです。

7. 実施メンバー

代表者:玉井亮輔(教育学部4年)

構成員:岡本知子(教育学部4年) 坂本実優(教育学部4年)

氏原小雪(教育学部4年) 荻田朱理(教育学部3年) 三宅由希子(教育学部3年)
中川昂史(教育学部3年) 上野優(教育学部3年) 國廣奈菜子(教育学部3年)
岩崎菜奈(教育学部3年) 前田光望(教育学部3年) 西本匠舞(教育学部3年)
松本菜那(教育学部3年) 藤川聡(教育学部3年) 小松奈那子(教育学部3年)
米盛心優(教育学部3年) 大立愛(教育学部2年) 三好葵生(教育学部2年)
大竹秀昂(教育学部2年) 末澤美咲(教育学部2年) 小倉莉子(教育学部2年)
安田葵(教育学部2年) 野上愛日(教育学部2年) 石原佳歩(教育学部2年)
藤岡辰樹(教育学部2年) 中越美優(教育学部2年) 粉井良哉(教育学部1年)
上田和果(教育学部1年) 磯野舞奈(創造工学部3年) 明坂千慧(法学部2年)
高井花菜美(教育学部2年) 三好結愛(教育学部1年) 中村汐里(教育学部1年)
岩本梨(農学部1年) 河井美喜(法学部1年)
日和佐翔太(法学部1年) 眞鍋裕也(創造工学部1年) 佐野朝瞳(創造工学部1年)
長尾健太郎(創造工学部1年) 杉本蒔志(創造工学部1年) 細谷真子(教育学部2年)
青山夕夏(香川大学教員)

8. 執行経費内訳書

配分予算額		200,000円		
執行経費(品目等)	数量	単価(円)	金額(円)	備考
チラシ	32,000	4.38	140,160	
パンフレット	1,300	41.80	54,340	
ポスター	5	1,100	5,500	
*デザイン含む, 封入作業含む				
合計			200,000	